

日本比較文化学会中部支部ニュース

第8号 2016(平成28)年2月10日発行

第8回中部支部大会(9月27日)のご報告 初の名古屋開催

中部支部では平成27年度中部支部事業計画に則り、支部で最初となる名古屋での大会を開催いたしました。大会実行委員長の樋口謙一郎先生をはじめ、関係する諸先生方のご尽力により、当日は、盛会でありましたことをご報告いたします。大会の日程、会場、実施内容等の詳細について、以下にご報告いたします。

I. 大会日程 2015(平成27)年9月27日(日)

II. 大会会場 相山女学園大学星が丘キャンパス 文化情報学部メディア棟001教室

III. 大会スケジュール 13:00～16:45

第8回支部大会実行委員長:樋口謙一郎(相山女学園大学)

総合司会:川口雅也(浜松学院大学・中部支部副支部長)

開会のご挨拶:澤田敬人(静岡県立大学・中部支部長)

【第1部】(13:00～13:50)基調講演

【第2部】(14:00～16:40)自由研究発表(一人発表20分+質疑応答10分)

司会:川口雅也(浜松学院大学) 樋口謙一郎(相山女学園大学)

閉会のご挨拶:安藤雅之(常葉大学教職大学院・中部支部副支部長)

基調講演

多文化共生—これまでとこれから—

津村公博(浜松学院大学現代コミュニケーション学部教授・中部支部副支長)

趣旨:津村先生は、静岡県西部に住む南米日系人の暮らしに係る調査研究を長年実施し、その結果を踏まえて多数の支援事業を主導している。さらに、子どもから大人

へと成長する日系人のアイデンティティを深く掘り下げる映画の監督をお勤めになり、現在も多忙を極めている。その津村先生から、我が国におけるこれまでの多文化共生の諸施策を振り返り、今後の展望を述べていただいた。また、比較文化学において多文化共生を研究することの意義を明らかにするために、基調講演後には、フロアとの討論を実施した。

進行・討論：川口雅也（浜松学院大学・中部支部副支部長）

自由研究発表抄録

カンボジアの古典舞踊にみる伝統文化教育の位置づけ
大矢隆二（常葉大学）・安藤雅之（常葉大学大学院）

1. 研究の目的

本研究では、カンボジアシェムリアップ州の初等教育学校を対象に行った訪問調査とカンボジア古典舞踊の文献調査をもとに、教育現場で伝統文化教育がどのように展開されているのか、また、教師や学校のどのような考えのもとに実践されているのかを明らかにし、日本の教育現場における伝統文化教育への示唆を得ることを目的とした。

2. カンボジアにおける古典舞踊教育

古典舞踊は、カンボジアを代表する優雅な群舞である。インドからもたらされたヒンドゥー教の影響を受け6世紀頃に始まったと考えられ、宮廷の儀式の中で恭啓されてきた歴史があり、基本的な倫理観、社会的な道德観念を培い、平和で豊かな文化・社会を構築するために必要な民族のアイデンティティの一部として大切に継承されてきている。現在、カンボジアの初等教育では、伝統文化教育の一つとして古典舞踊が取り扱われている。古典舞踊は、Social studies (Grades1~3はScience&Social studies)において第2学年から取り扱われ、第6学年まで学習する。内容は、ダンスの練習、各家族の祭り、クメールの歌と踊り、歌と伝統舞踊など、昔年から現代社会に至る伝統文化の変遷を取り扱っている。古典舞踊の教育は、音楽と習俗、伝統的な楽器の伝承、優雅な身体表現の道理を学ぶとともに、カンボジア社会において継承に値する価値ある文化、国民にとり親しみのある文化であることへの理解、そして、生涯を通じ舞踊に親しみ、国民にとって主体的に伝統文化の継承に参画する資質・能力の育成が大きな目的であると推察できる。

3. 伝統文化教育の課題

進学率の問題として、初等教育の就学率に比べ、前・後期中等教育の就学率が下がり、積み上げた古典舞踊における自文化教育の系統が閉ざされるという現実が明らかになった。また、若年層の文化的志向が先進アジア諸国の現代文化に向かっていることが確認された。

4. 日本の教育現場における伝統文化教育への示唆

わが国では、異なる文化を持つ人々と協調していく態度や資質を育むことを目指したグローバル対応力を育成する教育が求められている。そのため固有の特殊性を活かした段階的・系統的な指導を展開することができるカリキュラム整備や学習内容の吟味が急がれる。

自由研究発表抄録

新渡戸稲造と女子教育
小林竜一(早稲田大学)

周知のように、新渡戸稲造(1862-1933)は英文著作『武士道』(1900)の著者として理解される傾きがある近代日本人であるが、その本質は広範な領域で活躍した学際型知識人の先駆者であった。

従来の新渡戸研究においては、思想史、日本文学、ヨーロッパ語系文学、各国文学・文学論、外国語教育、日本史、国際関係論、経済学説・経済思想、社会学、教育学、農業経済学など、新渡戸の活動領域の多面性から研究対象である新渡戸にはカテゴライズの困難という問題がつきまとい、この「新渡戸とは何者か」という問題は、新渡戸研究者を悩ませ、アカデミズムにおける新渡戸研究が停滞する一因となっていたように思われる。

新渡戸には女子教育の推進者としての側面があり、たとえば青山なを「近代日本女子教育と新渡戸稲造」(『新渡戸稲造研究』東京女子大学新渡戸稲造研究会、1969年)をはじめとして、女子教育との関連から新渡戸をつかまえようとした先行研究は決して少ないわけではない。新渡戸自体、国家官僚としては内外で女性の実状に知悉するところがあり、教育者としては多数の女学校の運営に関与し、啓蒙家としては婦人向けの総合雑誌に多数の論考を寄稿するなど、女子教育の分野に限定しても新渡戸の活動領域はやはり多岐にわたるものであった。

ただし、新渡戸の言動が女子教育にカテゴライズされて考察された場合には、女学校との関与であるとか、同時代の女子教育推進者との人的交流といった外観上の事実関係が誇大視されてきたように思われる。その代償として、新渡戸が女子教育を推

進した本質的な要因については、ものの見事に閑却されてきたのではあるまいか。しかし、それがいかなるものであれ、所詮、人的交流の羅列は新渡戸の言動の根幹をなす本質の理解に直結するものではない。

本発表では、新渡戸の女子教育観、女学校への関与、あるいは女子教育家との人的交流といったOuter Lifeに対しても一定の重みを与えるとともに、新渡戸の生涯を俯瞰することにより、新渡戸が女子教育の推進に情熱を捧げるに至った根本的要因を指摘したい。

自由研究発表抄録

文学に描かれた女性たちの表象に関する一考察ー書く女、読む女、連帯する女、行動する女たちー

水町 いおり(中京大学・愛知学院大学・愛知産業大学非常勤講師)

本発表では、フランス19世紀の文学小説に描かれた女性主人公たちを取り上げ、王政復古(1815-1830)、七月王政(1830-1848)、第二共和政(1848-1852)、第二帝政(1852-1870)と、目まぐるしく変化するフランスの社会情勢と、小説における女性たちの描かれ方の間にいかなる関連性があるのかを分析する。論考を行う際には、歴史的考察とテキスト研究という複合的視点から課題にアプローチする方法を採用することにする。

今回取り上げるのは、バルザック著『田舎ミュージズ』、フロベール著『ボヴァリー夫人』、モーパッサン著『女の一生』、ゾラ著『ナナ』の4作品である。これらの作品に共通するのは、主人公の女性たちが、理由こそ異なるものの一様に不幸であること、そして、これらの不幸な女性主人公を描いたのは、すべて男性作家であるという点である。男性作家が描いた不幸な女性たちを、歴史的な流れとともに分析することで、男性が女性を見るまなざしの変容、女性の社会的立場の変遷、女性たちの心象世界、そしてその小説に固有のジェンダー構造など、さまざまな事柄が明らかになるだろう。

本発表では、まずは、彼女たちの不幸の原因の所在を明らかにしたい。彼女たちの不幸は外的環境によるものなのか、彼女たち自身の特性による内的問題なのか、あるいはその双方を含有したものかなど、主人公たちを比較しながら不幸の原因について分析を行う。

次に、彼女たちの不幸に対する「振る舞い」についての考察を行う。忍従の精神で耐える女、詩を書くことで苦しみを昇華する女、言葉には出さず黙って行動で示す女、連帯する女、言葉と行動で現況に立ち向かう女など、彼女たちは自分の不幸に対して

様々な振る舞い方をする。本発表では、これらの振る舞いを通して、女性たちの揺れ動く心象世界を明らかにするとともに、その振る舞いの意味を考えてみたい。

そして、最後に、彼女たちの不幸とその振る舞いについて、社会背景や歴史的変遷との関連性をもとに分析を行いたい。その際、男性作家の女性を見つめるまなざしの変容や、女性の社会的立場の変化についても考察し、19世紀のフランス小説に描かれた女性たちの姿について、連続性を持った意味づけを示して本発表のまとめとしたい。

自由研究発表抄録

カンボジアの学校教育と教員養成に関する考察

安藤 雅之(常葉大学大学院)・大矢 隆二(常葉大学)

1. 研究の目的

本研究は、アジア特有の文化を基盤として今日急速な経済発展を遂げているカンボジアの学校教育の現状を文献及び訪問調査を基にして明らかにするとともに、教職志望学生を対象にした質問紙調査を通して、カンボジアにおける教員養成教育及び学校教育の課題を導出することを目的とする。

2. カンボジアの学校教育の現状

カンボジアでは、1996年に小学校6年間、前期中等学校3年間、後期中等学校3年間の6・3・3制が導入され、小学校と前期中等学校の9年間は無償義務教育となった。カンボジア固有の社会的、経済的等の問題から、学校は2部制を敷き、カンボジア国家カリキュラムに準拠して、年間38週、週6日制で授業が行われている。また小学校段階から1年に2回進級試験が課せられ、後期中等学校へ進学する場合はGrade9時に国家統一試験を受け「基礎教育修了資格」を取得しなければならない。さらに、高等教育段階への進学は、Grade12時に国家統一試験を受け「後期中等教育修了資格」を取得する必要がある。しかし現状、家庭の事情から小学校段階から途中退学する児童生徒の割合は非常に高い。また、国際協力支援等による新たな教授法が紹介され、教員の指導力向上が期されているが、実際学校では伝統的教授法(暗記中心)による授業が中心で教員の研修機会もない。

3. 教員養成教育に対するカンボジア国立教育大学の学生の意識と実態

2014年3月、常葉大学と学術交流協定を締結しているカンボジアで唯一の教員養成大学・カンボジア国立教育大学(以下、NIE)の学生へ質問紙(選択回答設問6、自由記述3)による調査を245名の抽出学生を対象に実施した。NIEにおける教員養成

期間は大学卒業後の1年間である。調査の結果、顕著な表れとして「教員としての資質・能力を形成している」と回答した学生は99%、「授業を通して教材を開発する力を身に付けている」は90%にのぼる。さらに目ざす教員像を「心の美しさ」や「公正さ」を備えた教員と表明した学生が多かった。教員としての自覚やプライドが強く意識されていることがわかる。

4. カンボジアにおける教員養成と学校の課題

カンボジアは教員養成期間が世界的に見て非常に短く、専門的知識を身に付け指導力を向上させる場や機会が少ない。又、学校状況も地域差があり教員の力量形成が課題となる。

自由研究発表抄録

「留学研究」の比較的考察

樋口謙一郎(相山女学園大学)

1. 問題意識

筆者はここ8年ほど、学生の海外語学研修(学部の正規科目)を担当している。これまでは英語圏(カナダ、シンガポール)の語学研修を企画、実施してきているが、自らの学生時代の海外経験や、その当時に当然視していたことが通用せずに悩むのが常である。学生の語学習得意欲、研修先の学習環境、リスク管理など多様な問題が留学教育にはつきまとうが、これが教育実践の問題であるにもかかわらず、日本においては、アウトバウンド海外留学・研修に関する体系的な研究は多くない。

2. 日本における「留学研究」と近年の海外留学推進

広義に捉えれば、幕末(開国)期から明治期の海外留学に関する研究や、戦後沖縄の「米留」に関する資料の整備など、日本でも「留学研究」やそのための資料整備が存在しないわけではない。しかし、それらは西欧近代文明・異文化受容史の観点から討究されてきたものである。

他方、日本の海外留学者数は2004年をピークに減少し、2012年に8年ぶりの増加となった。留学者数の減少傾向については「日本人の『内向き志向』や、リーマン・ショックによる景気の悪化などの影響が指摘されてきた。政府は20年までに12万人に増やす目標を掲げている。今後、就職先である企業や国がどれだけ強力に後押しできるかが目標達成の鍵になる」という状況である(『朝日新聞』2015年3月27日付)。そして、教育政策や国際教育の観点からの調査研究は行われている一方で、特に留学(教育)の現場に根ざした研究の拡大はこれからという状況である。

3. 欧米における「留学研究」の現状と今後の展望

欧米においては、近年、「留学研究」が質量ともに拡大し、国際会議も増えている。その関心を見ても、アイデンティティやカルチュラル・アウェアネスなど留学者の文化観にかかわる問題、ダイバーシティと留学、留学担当部署の役割、留学経験者の語りの分析など、留学の現場にかかわる研究が目立つ。

今後の「留学研究」においては、留学者の単線的な数的拡大という思考枠組にとらわれることなく、留学先や目的の多様化に着目することや、留学現場の声に耳を傾けることなどが、さらに重要になるであろう。

2015(平成27)年度中部支部例会・総会のご案内

以下の日程で、中部支部例会・総会を開催いたします。今回の例会では、話題提供者を囲む勉強会を開催します。川口雅也先生(浜松学院大学)が多様性と多文化共生を考えるための話題を提供します。また、自由研究発表にご応募いただきありがとうございます。中部支部例会で皆様とお会いできるのを楽しみにしております。

日時:2016(平成28)年2月20日(土)例会13:00~16:25

総会15:50~16:20

場所:静岡県立大学国際関係学部棟3316教室

「中部支部」会員募集

中部支部大会・例会の開催者募集

中部支部では、「中部支部」会員を募集しております。当面、中部支部は他支部との合同による全国大会の開催を目指しています。中部支部が、全国大会開催や紀要編集をも担える支部にしていくために、皆様のご協力を賜りたくお願い申し上げます。

また、今後も中部支部大会・例会を開催することを予定しております。つきましては、開催会場を提供する意思のある先生を募集致します。

中部支部をより充実・発展させていくために、是非ご協力いただきたく、お願い申し上げます。開催を希望される先生は、下記までご連絡下さい。お待ちしております。

○連絡先(中部支部長 澤田敬人):sawada@u-shizuoka-ken.ac.jp

○同(中部支部事務局長 川口雅也):kawaguchi@hgu.ac.jp

『中部支部ニュース』第8号

発行:日本比較文化学会中部支部

事務局所在地:〒432-8012 浜松市中区布橋三丁目 2-3

浜松学院大学 川口雅也(事務局長)